

神戸・南京をむすぶ会 松田ヒロ子さん 講演会



コロナの収束がなかなか見えず不安な毎日が続いていますが、みなさん、いかがお過ごしでしょうか。神戸・南京をむすぶ会は 1997 年以降毎年中国を訪問してきましたが、昨年と今年、コロナのために訪問ができません。今回、先月の朝日新聞で紹介された『沖繩の植民地的近代』をだされた松田ヒロ子さんをお迎えして講演会を開催することにいたしました。コロナ下、ZOOM での開催となります。

日時：2021 年 7 月 24 日（土）午後 2 時～4 時
 会場：ZOOM 参加希望者は、飛田（ひだ）hida@ksyc.jp
 まで申し込みをお願いします。
 参加費：500 円 郵便振替<00930-6-310874 神戸・南京をむすぶ会>で送金ください。

講師：神戸学院大准教授（社会史・歴史社会学）
 松田ヒロ子さん
 テーマ：「植民地台湾と「加害者」「被害者」
 —松田ヒロ子著『沖繩の植民地的近代』（世界思想社、2021 年）を手がかりに」
 講師プロフィール
 1976 年生まれ。神戸学院大准教授（社会史・歴史社会学）。『沖繩の植民地的近代』は、英文で刊行した単著を、日本語読者向けに書き直したものだ。他に、「石垣島で台湾を歩く：もうひとつの沖繩ガイド：八重山発の地域教材」（沖繩タイムス社、2012）「植民地台湾から米軍統治下沖繩への「帰還」」（『文化人類学』2016）、『多文化共生のためのシティズンシップ教育実践ハンドブック』（『現代社会研究』2019）などがある。（朝日新聞の書評参照）

2021年(令和3年)6月19日(土) 13版S 読書 20

沖繩の植民地的近代

台湾へ渡った人びとの帝国主義的キャリア

松田 ヒロ子(著)

世界思想社 4180円

越境が生んだ特権の禍々しい光

タイワン・イス・パラタイス。戦前を台湾で過ごし、日本の敗戦によって、内地に引き揚げてきたある日本人による表現だ。少年時代を無邪気に追憶し、そして語るのは、個人の感慨といつかたで情緒的に包み隠された、日本の統治下にあった台湾の彼が、現地の人びとと対峙し、あらゆる特権を享受している境遇であったという事実が仄めかされている。

「日本人のライフスタイルを「上昇させる」ことを目的として、琉球人を「琉球人」から「日本人」へと変換し、その過程で「帝国」の統治を有利に働かせた。本書は、「国民国家」としては、日本が「国民国家」の一部として、その「近代化」の過程で自己のキャリアを形成した人びとの「植民地経験」に着眼する。／「戦前から戦後まで、日常生活の延長としての往来から家族を伴って半ば永住するつもりで台湾に渡った」いわゆる「無名の」人たちの自叙伝や手紙、語りをとおして、彼や彼女らの「境界領域での生き様や越境経験」と丹念にむきあう著者が明らかにしてみせるのは、沖繩の、それも特に、首里からは遠く離れた八重山諸島出身者にとって、「社会的上昇を目指す上で『日本人』になることは極めて大きな意味を持っていた」という事実である。／だからこそ彼らは「みずからの境界性を利用しつつ近代的主体として生きた」。しかし、「日本本土系移民の沖繩蔑視を内面化しながら成長」した沖繩系台湾移民にとっての「帝国日本」とは、誰にとつてのパラダイスだったのか？／胸に手をあてて問いたくなる。「沖繩」「台湾」「日本」の境界で「支配—被支配の間を往復した人びと」が希求した特権が放つ禍々(まがまが)しい光は、ほんとうに過去のものなのか？／台湾のパイワン族と宮古島の刺青があしらわれているカバーも注目に値する。(評者：温又柔)

＜新聞記事＞逆に言えば、日本人でさえあれば「支配者」の側にいられる植民地では、「標準日本語を話し、(日本人)のライフスタイルに同化する」ことは、「象徴的地位」を上昇させることにも繋(つな)がる。／とりわけ、「琉球併合以来、日本人による差別と偏見に苦しんだ沖繩の人びと」とっては、こうした「帝国内の統合と格差の構造」は有利に働いた。／本書は、「国民国家日本の辺境」としてではなく、「植民地帝国日本の境界領域」としての「沖繩」を「被植民地であるとともに宗主国の一部」とみなし、その「近代化」の過程で自己のキャリアを形成した人びとの「植民地経験」に着眼する。／「戦前から戦後まで、日常生活の延長としての往来から家族を伴って半ば永住するつもりで台湾に渡った」いわゆる「無名の」人たちの自叙伝や手紙、語りをとおして、彼や彼女らの「境界領域での生き様や越境経験」と丹念にむきあう著者が明らかにしてみせるのは、沖繩の、それも特に、首里からは遠く離れた八重山諸島出身者にとって、「社会的上昇を目指す上で『日本人』になることは極めて大きな意味を持っていた」という事実である。／だからこそ彼らは「みずからの境界性を利用しつつ近代的主体として生きた」。しかし、「日本本土系移民の沖繩蔑視を内面化しながら成長」した沖繩系台湾移民にとっての「帝国日本」とは、誰にとつてのパラダイスだったのか？／胸に手をあてて問いたくなる。「沖繩」「台湾」「日本」の境界で「支配—被支配の間を往復した人びと」が希求した特権が放つ禍々(まがまが)しい光は、ほんとうに過去のものなのか？／台湾のパイワン族と宮古島の刺青があしらわれているカバーも注目に値する。(評者：温又柔)

主催：神戸・南京をむすぶ会（代表・宮内陽子／副代表・門永秀次、林伯耀／事務局長・飛田雄一）
 〒657-0051 神戸市灘区八幡町 4-9-22 神戸学生青年センター内（※5 月より左記へ移転しました）
 TEL 078-891-3018 FAX 078-891-3019
 ホームページ <https://ksyc.jp/nankin/> e-mail hida@ksyc.jp